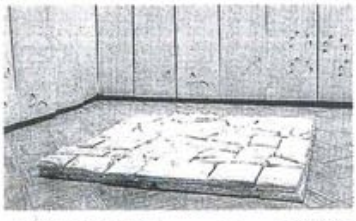

（第3種郵便物認可）　中　日

ているのが「いきいき運動教室」「リハビリ教

舎では四十～八十代の女性五人がストレッチ、有

は「皆さん同世代の人に

発しないし、ほかの病気

た。三年間で体重が一五

ト」で読めます。

羽島のＮＧＯが物資輸送

被災地に「頑張れ」コール

東日本大震災

ＮＧＯに集まった救援物資を積み込む入口さん㊨＝羽島市小熊町で

東日本大震災で、羽島市のＮＧＯ「アジア太平洋子供救済センター　この指とまれ」の救援物資第三陣が十八日、宮城県に向けて同市を出発した。第二陣に続き、再び被災地へ向かうトラック運転手入口明彦さん（五二）＝長崎市＝が出発前、本紙の取材に被災地の様子を語った。（石井宏樹）

同ＮＧＯは十五日に第二陣の救援物資を福島県へ発送。入口さんが運搬し、福島県小野町役場に届けた。別の仕事で宮城県多賀城市に仮設トイレを届け、今度はＮＧＯの物資を宮城県大崎市に運ぶ。

多賀城市では、仕事で通ったことのある街並みが跡形もなく崩れていた。二十㌧以上あるトラックが折り重なり、家の二階に車が突き刺さる。小野町には福島原発の近隣住民が避難し、目に見えない放射線の恐怖に疲れ果てた様子だった。

小野町役場で荷卸しをする際、入口さんが「頑張れ」と声を掛けながら町の職員に段ボール箱を手渡すと、職員らも「頑張れ」コールを繰り返し、リレーのように役場内に伝わった。「岐阜のボランティアが集めた物資を手渡しでき、被災地に温かい気持ちが伝わった」と話す。

紙おむつなどさらに募る

同ＮＧＯは救援物資を募集中。大人用、子ども用の紙おむつと生理用品、ウエットティッシュ、粉ミルク、ベビーフード、紙皿や紙コップ、割り箸で、いずれも未開封の新品のみ。持ち込みは二十一～二十四日の午前九時半～午後四時。郵送は二十三日必着。持ち込み、郵送先は〒501　6273　羽島市小熊町2の365　「アジア太平洋子供救済センター　この指とまれ」。運送費の寄付も募っている。

陸前高田へ１万2000食

美濃加茂の業者　即席麺など送る

美濃加茂市加茂野町の麺類製造業「桜井食品」で十九日、岩手県陸前高田市に運ぶ、自社のインスタントラーメンと焼きそば計一万二千食や生活用品が、トラック二台に積み込まれた＝写真。二十日朝に出発する。

桜井芳明社長（六二）が、陸前高田市でしょうゆ醸造業を営む河野和義さん（六五）に電話で支援を申し出た。二人は中小企業の勉強会を通じた友人。河野さんは妻子の無事を確認後、電話が通じる一関市内の親類宅で避難所情報を集約している。

「店が閉まっていて新品の下着やおむつ、生理用品など消耗品がない」と状況を聞いた桜井社長が、会社のブログで呼び掛けたところ、大量の救援物資が集まったという。

桜井社長と娘婿の篤さん（三二）がトラックで出発。陸前高田市には二十一日朝に着く予定。桜井社長は「自分ができることはラーメンを送ることだと思った。逆境でもくじけない河野社長の笑顔に早く会いたい」と話していた。（安藤恭子）

岐阜のタウン情報を携帯で「中日新聞・中スポ」
動画や街角ライブカメラも見られます
iモード、Yahoo！ケータイ、EZウェブのニュースメニューからアクセス
※バーコード対応の携帯電話で読み取ってください。

伊藤慶二　林　武史

EXHIBITIONS ㊦

林武史は本展で新作の大作４点を展示します。写真はそのひとつ、天井からつるされた美濃和紙のリトグラフ「紅の庭」が四方を囲う中に、白大理石の「石間」が設置されています。

東京芸術大学で准教授を務める林は、在学中から石の彫刻を手掛けてきました。近年は、触れたり乗ったりできる体験型や、ワークショップで鑑賞者とともに制作する参加型の作品に変化しています。

林武史　「紅の庭」（奥）「石間」（手前）

2011年　（photo©山本糾）

この作品茶室です。でカタンてます。紅に、音を鳴の冷たい感ください。

（岐阜県・正村美里へ

「伊藤慶二展（中日新五月八日ま佐の岐阜県中。月曜休同館＝電1）131

松平規宏さん（三〇）＝各務原市＝がブログで大会を呼び掛け、集まった二十八人で開催。地震が発生した午後二時四十六分に黙とうをささげ、一人五百円以上の参加費を集めて、経費を除いた全額を義援金として寄付する。

大会では六チームを作って、さまざまな組み合わせで五分間のゲームを繰り返した。松平さんは「地震が起きてふさぎ込んだ気持ちを少しでも晴らしたかった。被災地の人たち